

第7回

上智大学アフリカWeeks

アフリカ地域との教育・研究交流を活発に展開

5月15日から29日まで、「第7回上智大学アフリカWeeks」が開催された。本学は、グローバル社会でより一層存在感を増すアフリカをグローバル化推進の戦略的地域と位置付け、アフリカ開発銀行や現地教育機関との連携締結、アフリカ研究の推進など、教育・研究交流を活発に展開している。今回のアフリカWeeksでは、講演会、セミナーなどを実施。公募で集まった学生有志がほとんどの企画の運営に携わり、司会や通訳補助などを務めた。

■アフリカのスラムに学
校を作る子どもたちの
笑顔、命の輝き

15日、ケニアのスラム
街・キベラで困難な状況
にある人とともに活動を
行う「マゴンスクール」を
運営する早川千晶氏を招
いて講演会が行われた。
冒頭、キベラで生活す
る人びとの現状を解説。
「さまざま困難を抱え
ながらも生きることを諦
めない人びとの前向きな
工夫の裏に、病と闘い、
姿を見ていると、学ご

るに死と隣り合わせにあ
る生活環境の過酷さがあ
る」と述べた。
続いて、マゴンスク
ール設立の背景や、絶望か
ら立ち上がり希望を持っ
て卒業したOBOGのエ
ピソードなどを紹介。ス
ラム街での学校運営の意
義の一端に、「教育は困
難から抜け出すための知
恵や技術につながる。マ
ゴンスクールのOBOG
が力強く前に進んでいく
姿を見ていると、学ご

この力を改めて実感す
る」と語った。
講演後の質疑応答で
は、日本からできる支援
・交流に関する質問に対
して「まずは知ることが
大切。そのためには対話
が必要で、対等な人間と
して向き合い、議論する
ことで新たな道が見えて
くる。同時に、現在まで
の歴史を学ぶことは今を
紐解く糧になる」と答え
た。会場には100人近
くの聴衆が集まり、オン
ラインでは約1200人が
視聴。多くの関心を集め
た。

大使館から外交官を招い
て講演会が開催された。
レソトは四方を南アフリ
カに囲まれた内陸の王国
で、国土全体の標高が1
400メートルを超える
ことから「天空の王国」
と呼ばれている。
はじめに、レソト王国
大使館で参事官を務める
ソリー・ママスツファ氏
が登場し、レソトを紹介
した。地理・人口などの
基本情報、教育システム、
歴史的背景、伝統衣装、
食料、家事道具などに
ついて、スライドを投影し
て、参加者は、自然豊か
なレソトの写真を見なが
ら熱心に耳を傾けた。
続いて、日本人との結
婚を機に来日し町田市で
暮らすレソト出身のルー
シー・コスギ氏が登壇。
現地での結婚の様子や
や、日本での生活や子育
の苦労などを語った。
講演後、レソトなどア
フリカ南部で古代から伝
わるボードゲーム「モラ
ババ」や、会場に持参
したレソトの伝統的な衣
装・帽子を紹介。参加者
は実際にゲームに挑戦し
たり、衣装や帽子を身に
つけて写真を撮影したり
と、思い思いにレソトを
感じていた。

■上智大学アフリカ研究
の柱でアフリカ展開を行
っていること紹介した。
続いて、本学でアフリ
カ研究に携わっている3
人の教員が順に登壇。
総合グローバル学部の
戸田美佳子准教授は、中
部アフリカ地域を中心
に、人間の暮らしが生態
的な環境とどのように対
応しているかを研究して
いる。その中で障害者の
営みにも注目。障害者を
通したアフリカ地域研
究、非西欧社会における
障害観、障害者と文化人
類学やジェンダー研究へ
の接合など研究テーマが
広がっていると話した。
外国語学部ポルトガル
語学科の矢澤達宏教授
は、アフリカとブラジルの
2つを研究対象として
いる。サハラ以南アフリ

油・天然ガスの輸入規制
による世界全体の供給量
不足や価格上昇について
触れ、「日本は自国のみ
ではなく世界80億人のこ
とを考え、またアジアの
代表としてアジアのため
に意見を言わなければな
らない。それがこの国が
生きていく道であり、我
々の責任である」と強調
した。

講演会後半のパネルデ
ィスカッションは、鈴木
史史地球環境学研究所教
授がファシリテーターを
務め、保坂長官と高校生
2人(栄光学園中学高等
学校、横浜雙葉中学高等
学校、本学学部生3人が
登壇した。脱炭素を促す

の柱でアフリカ展開を行
っていること紹介した。
続いて、本学でアフリ
カ研究に携わっている3
人の教員が順に登壇。
総合グローバル学部の
戸田美佳子准教授は、中
部アフリカ地域を中心
に、人間の暮らしが生態
的な環境とどのように対
応しているかを研究して
いる。その中で障害者の
営みにも注目。障害者を
通したアフリカ地域研
究、非西欧社会における
障害観、障害者と文化人
類学やジェンダー研究へ
の接合など研究テーマが
広がっていると話した。
外国語学部ポルトガル
語学科の矢澤達宏教授
は、アフリカとブラジルの
2つを研究対象として
いる。サハラ以南アフリ

インセンティブは何か」
理由は「今後日本で水素
エネルギーが導入される
のか」など、学生たちが身
近な疑問や質問を投げか
け、長官がひとつひとつ
丁寧に回答していった。
参加者からは「なぜ省
エネが重要なのか、改め
て理解できた。自学科の
学びとエネルギー問題を
どのように絡めていき
るか、考えを深めていき
たい」「資源エネルギー
と気候変動や環境問題は
シレンマの塊のようで、
折り合いをつけながら解
決のために奮闘している
のだと感じた」などの感
想が寄せられた。

最後に山崎講師から、
2015年から始まった
本学の実践型プログラム
「アフリカに学ぶ」の説
明があり、コートジボワ
ールにある協定校CER
AP(平和・研究活動セ
ンター)からのビデオメ
ッセージが流された。併
せて、アフリカ理解促進
につながる機会の創出な
ど社会貢献についても紹
介し、セミナーを締めく
くった。

■学生企画
学生有志25人がアフリ
カWeeksの企画全般
の運営を担った他、次の
学生企画を実施した。
①アフリカン・ワークシ
ョップ／コーヒーから知
るアフリカ
26日に大学生と高校生
を対象を限定してワーク
ショップを開催。本学卒
業生で、Warm Hearts
Coffee Clubを運営する
山田真人氏(文英および
神神卒)を招いて、コーヒ

ーを試飲しながら話を聞
いた。山田氏は自身の団
体が行っているマラウイ
での学校給食支援を紹介
し、学校給食が持つ力を
熱く語り、支援の仕組み
やフェアトレードについ
て詳しく紹介した。
②雑誌企画
雑誌企画は3年目。12
ページの雑誌「With
AFRICA」を発行した。
現在、学生センターや図
書館で配布している。
③図書館展示
図書館1階カウチャー
前で、アフリカの工芸品
やアフリカ関連書籍を紹
介する企画展を実施。6
月23日まで。
④その他の企画
20日に「アフリカ地域
研究者と話をしよう」、23日
に「ルワンダで義足を作
る」を開催した。



5月15日、2号館17階
で上智学院サステナビリ
ティ推進本部、上智大学
経済学部経済学科および
資源エネルギー庁の共催
「世界の中の日本のエネルギー情勢」を開催
高校生、大学生と共に学び考える

の下、資源エネルギー庁
長官の保坂伸氏を講師に
招き、「世界の中の日本
のエネルギー情勢」と題
して講演会を開催した。
次世代を担う高校生、
大学生など若者たちと共
に、グローバルな視点で
のエネルギー問題、サス
テナブルな社会を構築し
ていくうえでの課題につ

いて考えることが目的。
後半のパネルディスカッ
ションには本学学部生の
他、高大連携の一環で2
人の高校生が登場した。
保坂長官は、講演の中
で日本のエネルギー自給
率、電源構成について触
れ、エネルギー政策の大
原則「S+3E」について論
じた。Sとは安全性(Safe

ty)、3Eは安定供給(E
nergy Security)、経済効
率性(Economic Effi
ciency)、環境適合(Env
ironment)のこと。「ロシ
アのウクライナ侵襲前、
世界は環境適合に向かっ
ていたが、侵襲後のいま
安定供給に戻ってきてい
る。さらにコロナによる
景気悪化で、経済効率性
のコスト問題も起って
いる。3Eをバランスよ
く行う必要があり、環境
適合のCO2問題をクリ
アしたとしても、国が貧
しくなったり、停電が生
じたりするという訳には
いかない」と問題に直
面している」と述べた。
さらにロシアからの石

油・天然ガスの輸入規制
による世界全体の供給量
不足や価格上昇について
触れ、「日本は自国のみ
ではなく世界80億人のこ
とを考え、またアジアの
代表としてアジアのため
に意見を言わなければな
らない。それがこの国が
生きていく道であり、我
々の責任である」と強調
した。

講演会後半のパネルデ
ィスカッションは、鈴木
史史地球環境学研究所教
授がファシリテーターを
務め、保坂長官と高校生
2人(栄光学園中学高等
学校、横浜雙葉中学高等
学校、本学学部生3人が
登壇した。脱炭素を促す

の柱でアフリカ展開を行
っていること紹介した。
続いて、本学でアフリ
カ研究に携わっている3
人の教員が順に登壇。
総合グローバル学部の
戸田美佳子准教授は、中
部アフリカ地域を中心
に、人間の暮らしが生態
的な環境とどのように対
応しているかを研究して
いる。その中で障害者の
営みにも注目。障害者を
通したアフリカ地域研
究、非西欧社会における
障害観、障害者と文化人
類学やジェンダー研究へ
の接合など研究テーマが
広がっていると話した。
外国語学部ポルトガル
語学科の矢澤達宏教授
は、アフリカとブラジルの
2つを研究対象として
いる。サハラ以南アフリ

インセンティブは何か」
理由は「今後日本で水素
エネルギーが導入される
のか」など、学生たちが身
近な疑問や質問を投げか
け、長官がひとつひとつ
丁寧に回答していった。
参加者からは「なぜ省
エネが重要なのか、改め
て理解できた。自学科の
学びとエネルギー問題を
どのように絡めていき
るか、考えを深めていき
たい」「資源エネルギー
と気候変動や環境問題は
シレンマの塊のようで、
折り合いをつけながら解
決のために奮闘している
のだと感じた」などの感
想が寄せられた。

アフリカWeeksには多彩な顔ぶれが登場。
レソト王国大使館のママスツファ参事官も講演

5月15日、2号館17階
で上智学院サステナビリ
ティ推進本部、上智大学
経済学部経済学科および
資源エネルギー庁の共催

熱弁を振る保坂長官

保坂長官を囲んで

ワークショップは
全員が笑顔で終了

ワークショップは
全員が笑顔で終了

ワークショップは
全員が笑顔で終了

ワークショップは
全員が笑顔で終了

ワークショップは
全員が笑顔で終了